

下浦の開港史 (下)

主として中世の展望

東京都板橋在住(米水津村竹野浦出身)
会員 柳 手洗 一 而

(10) 下浦水軍の威力

大永七年(一五二七)梅牟礼開城後、佐伯氏は曲がりなりにも、前記した不仲兄弟惟楳、惟常によつて命脈を保つが、文献に現われるのは、惟常の子惟教の時代で、天正十九年(一五五〇)である。以後が佐伯氏再興の時代で、惟教は生涯を戦場で明け暮れる活躍をするが、下浦に参考になる資料は見当たらない。御手洗当主定信が惟治と滅死したさいでも、耳川の合戦である。天正六年(一五七八)のことで、この合戦で惟教父子は戦死する。そして十四年には、若い城主惟定が薩軍を迎え、堅田合戦で勝利を博し、梅牟礼城を死守している。

この時に、米水津衆にあつた感状が現在し、水軍を推察する唯一の資料と考つてゐる。だいたいの諸種の軍記ものを見て、水軍の實態について記録がないのは残念であるが、それだけ大内氏の佐伯藩侵攻以来、外敵の侵攻のなかつたことは、住民にとって幸いなことである。

さて、惟定の感状には、
「今度其表下の警固に於いて、数十艘罷り上り取懸り候延、連り油漸無く右大和を得らば候 云云」とある。

先づ、この大和とは、島津水軍が佐伯湾に入れたかつたこと、つまり、堅田に陸路侵入した島津軍と、海上水軍との連絡を断つたことによると、私なりに解釈している。実際には島津水軍は津久見湾に向つてゐる。

作戦面は後で触れるとして、次に軍船「数十艘」が船数や兵数を示す。中世水軍資料の唯一の手懸りとなつてゐる。

当時の水軍船の種類については、小早・早船(開船)・將船・武者船・弓船・鉄砲船・物見船・使番船等があるが、地域別な呼称は別として、佐伯水軍に八十艘・百艘立ての安宅造りの構造ともつ將船(安宅船ともいふ)があつたかどうかは疑問である。せいぜい四五十艘の開船ではなかつたかと思われるが、一番小さい使番船の小早にして五六艘立てで、ふつうの早船は十艘から二十艘位の大きさである。

徳川期から、つい最近まで残つた「ジヨイヤラナ」で有名な「大船」は、七八艘立てでその名残りである。この大船が急遽と満載して目方を換算すると、平均して二十数人の人員が乗れることになる。もちろん、水夫・武士を含めてであるが、一してみると、「数十艘」は約千人から千五百人位となる。これが人口の二つの目安になる。

ついでに、毛利藩が最初に人口を調査した結果、室永七年(一六一〇)には、浦方三六五九人として、非常勤員数を示している。

この数字から類推すると、感状にある数十艘の勤員数

千人から千五百人は、米水津湾だけで動員できる数にしては多すぎると思われる。佐伯湾・津久見湾（必ずしも新領はばつきりしない）を動員して三千強とすれば、天正年間の数十艘は、感状のおて名が米水津衆としても、開船・早船・小早大小を合わせて、下浦を統合した戦力とする方が妥当だと推察される。

そしてこの数字は、「一領具足」の目安で書いた、各湾三百人を率いる部将の地位と一致することになる。

では、この数十艘の軍船が活躍した役割は何であったか。もちろん島津水軍による補給、佐伯湾揚陸の遮断であるが、作戦的意図については、米水津湾の位置が問題である。

佐伯水軍の將船基地を、佐伯湾のどこかに仮定すると（江戸期は字の通り大船繋がりうらうら）、竹野浦で統合する下浦水軍は、本隊と支隊との関係にある。先に榎森合戦では補給の一翼をにない、大舟勢が佐伯湾成かりを窺視する間に、後背から包囲作戦をとり、島津軍に対しては、陽動作戦によって、佐伯湾への侵入を防いでいる。

この包囲せん滅戦と陽動作戦の両面かといえる位置が下浦であり、私が佐伯水軍と名付けたくなるわけである。そして、この下浦水軍の威力こそ、十五世紀初頭から、佐伯氏との約束事によって開港した、下浦開港の成果であり、軍事面でも重要な作戦的意義をもったことになる。

(11) 独自の開港による影響

戦国時代の後馬期に、法華津氏（成松氏）、入津湾に長曾我部遺臣、蒲江に河野残党と、一連の落武者が流着するが、佐伯氏の下浦拡充政策によって、歓迎すべき

客であったかも知れない。しかし不運にも佐伯氏は大友氏の除国と運命を共にして、下浦も毛利氏と政權交代をみることになる。

ついでに少し補足しておきたい。

下浦の落人の歴史は、単なる一地方の出来事でありながら、すべてが中央に直結した動乱に起因している。南北朝時代の結果であり、戦国時代の副産物の所産である。そして、徳川時代になると、がらりと採相を変えてくる。徳川を頂点とする階級毛利氏に支配される下浦は、全国的にサラリーマン化する武士に支配される。民衆のゆきさしならぬ抑圧の歴史に終始するが、この近世における開港は別の機会に譲るとして、現在形を基盤の出来る中世の下浦開港の過程の裏には、各氏族特有の伝統が培われてきたとみたい。

さて、冒頭に佐伯氏の積極的な開港はみられないと書いたが、それを立証するように、佐伯氏の原始神とされる榎無明神や宇佐八幡宮の勧請日、下浦はみられない。蒲江の熊野一統と王子神社の関係、御手洗一族と三島明神（大山廣神社）の如く、各氏族が氏族の祭神を祀っているのは、荘園での特徴である。

又、交通面では、下浦の後背地が峻厳な山岳地帯であるため、佐伯氏との交通路は、ほとんど海路に限られ、陸路における各氏族間の交通は、あまり問題視されなかつたと思われる。このことは、各氏族が文化生活圏を築き上げる上に、独立採算制を試みた傾向は、各氏族毎にあるが、陸路の開港が違れ、下浦全般にわたる氏族の開港性にはつながる。そして、傳統の上り、風俗・気風・習慣の違いを残すことになる。

その結果、私は、米水津湾では伊予の習慣や言語のつながり、入津湾では肥後や土佐の風習、蒲江では同じく伊予や九州との関係、また名護屋湾では日向との関係等、今後の研究によつては、新しい分野が発見出来るのではないかと思つてゐる。

一般鮎には、同じ佐伯荘内で郡部と根本的に異なる点が特徴である。中世における佐伯地方は、郡部は佐伯氏の一族一門によつて全地域がしめられるが、下浦にその傾向は全くみられず、気質や土の考え方が異なるのは当然であるが、共通の外敵以外は各自の文化に固執したため、氏族間の影響はおまうみられない。だから、不文律の如く各氏族間の摩擦もなく、その上で完全に佐伯氏との主従関係が統一されていたという特色がある。

(2) むすび

下浦の中世を展望して、下浦と佐伯氏があまり結びつかないのに当惑している。私の見方はたよつてゐるかもしれない。

しかし、佐伯氏の除斥と共に、佐伯遣臣はことごとく百世(庄屋職)に身を引いた如く、同じ中世でも、前支配者の佐伯是本に代表される佐伯部民氏の伝承も全く聞かない。

だから、史実に忠実であればあるほど、郡部と違つた見方とせざるを得ない結果になつてくる。ふつう中世の地域開発は、支配者の一族が代官を通じて、ある拠点を根柢にして勢力を拡張しながら開発されてゆくのが通例であるが、佐伯氏の場合例外といえよう。そのため、佐伯氏が入郷以来十六世紀の終りまで統治しながら、支

配者の一族名や、文化遺産の一つと残されたいという思議な現象になる。

この稿を終るにあつて、下浦開発の幾つかの特色を要約すると、

「下浦の開発は、大神佐伯氏の入郷以来、その地頭化と共に、佐伯荘に組入られ、開花期を迎える。しかし、佐伯氏による直接的手段はみられず、外來者へ落人への開拓に任せられるが、その利害関係は一致する。すなわち、落人氏族は、佐伯氏の海岸線防備の最前線防人勤役目と果たしながら、身の保全と領土の安堵を保証される。そのため、各氏族は、自己防衛整備のため、夫々の文化生活圏を独自に発展させ、独立採算制に近い主従関係を保つことになる。その結果、佐伯氏文化より、先住地における、各氏族伝統文化の継承がみられる。そして、外敵に対しては共通の目的をもち、下浦の位置が、戦畧的価値の要地となつたことが戦乱を免れ、その開発に寄与したことは幸いである。」

といふことになる。

ついでに、私は過去の歴史を考察するとき、必ず現在と比見することにしてゐる。

中世と現在、辺世と現在について、現在社会の地域開発に、面白い現象が見られるからである。現在の蒲江町は、入津湾を併合して、海岸地域のめざましい発展をなしてつたがあるが、旧藩時代はどうであったらうか。各大庄屋に管掌される各浦・湾は、吉野役所を基点にして結成されている。藩と蒲江、藩と入津といふ如く、個別的な線である。

しかし、中世における下浦は、私が勝手に名付けた裏水軍の形でみられる、下浦単位に思考が見られる。これは、戦国時代と徳川時代の相違かも知れないが、佐伯氏の考え方が、より統一的であり、開発に必要な種々の要因を、自在に認めていたことにはならないかと推測している。

してみると、開発の要件は、必然的に諸条件から横の連帯にあり、中世に、米水津・入津・蒲江を総括して佐伯氏と結ぶ線は、現在の蒲江町の発展と同じ形態をとり、徳川時代よりむしろ中世に近かったことになる。

こうして、徳川氏を隔離して中世の下浦を展望するときは、旧藩時代よりも、より自由により多様な開発の手段方法の進歩を想像するのは、これこそ歴史の興味ではないかと考えている。

しかし、このことは、今後毛利藩制度の下浦政策を研究する課題を絞すことにもなる。

逸記

この私稿は、下浦開発史を研究する下瀬として、昨年税務しながら、資料不足が不満のまま、そのまましておいた。案の定、史談先号(共佐伯史談第三三〇五号)で佐伯氏の研究があり、従来の中野博士に対する反論があらって贖目した。

しかし、松岡氏の反論が手許にないまま、私の視点も満足させてくれるとは限らず、発想の着眼点を整理して後記としたい。

問題点は、大野大神氏の出自について、宇佐大神氏の庶流であるか、大野郡領になつた大神良民の庶流か、大

和大神氏の出であるかということであるが、これはともなわず、佐伯氏の祖とする大神惟基が、上記の二説に、史実をもつてどのようにつながるか問題である。

私は歴史文書の道を進む者として、常に学者も研究者も諸説から、素人なりに納得のゆく史実を頂戴することにして、そこで、大神惟基が佐伯氏の始祖として実在する人物とすると、果だしていつの時代の人であるかが問題となる。

中野博士は、その立証に対して、佐伯氏系図と都甲系図・文書を比較考証して、「倭信仰史の研究」の中に、「大野大神も惟基より惟宗・泰基が五代であり、連見大神も貞正より家実が五代である。然れば惟基・貞正は十一世紀後半の人物であることとなる」と推定している。

松岡説では惟基を庶幾の子としてゐるらしいが、では惟基といふの時代の人物に推定するか知りたくなる。佐伯氏は先儒の行間に「大神庶幾は寛平四年(八九三)から昌泰(八九九)・延喜(九〇一)にかけて「一」と庶幾の年代を教えてくれたが、この年代と十一世紀後半の惟基とは、一世紀以上の隔りがあつて、父子としてはどうも結びつかない。歴史家は通常一世紀四代と計算するらしいが、この五六代の年代差は、傍証でもない限り、推論の域を出ないことになる。庶幾以下は六国史には現われないが、良臣の庶幾の系譜は、大野章平亦しか見られないと聞いている。だから、この間の事情を説明するならば、佐伯氏の説く在庁官人の武士化への発展が一番当を得ているが、とにかく、松岡氏の年代考証が先ず知りたいと願っている。

中野説の不明な点については、私稿の中におけてお

友が、十一世紀末に大野荘に入部した惟基の子が、一
様に惟基を領王化する速度に疑問があり、それ以前の宇
佐大神氏の影響については、全くつかめないでいる。そ
のためにも、宇佐大神氏庶流の祝氏にある「惟」字を通
名とする年代数とか、一族の流れを一番知りたいと思っ
ている。

更に、宇佐八幡を勧請した大野八幡宮の成立について、
宇佐大神惟基の大野荘八部以前か以後かとか、庶流の
惟基と宇佐八幡の關係、日向配流の杜女のおとと惟基の
關係など、知りたいたいが一杯出てくる。中野博士によ
ると、大野郡と八幡神の關係ができたのは、天平勝堅二
年(七五〇)二月二十九日(宇佐大鏡)とし、宇佐大神氏と古
い關係のある大野荘に、かりに行政官として入った大和
大神氏との間に、親縁關係は誰も考へなくてよいかなど、
面白い発想も落かんでくる。

私は、歴史の空白の中に、その尊嚴と意味の悔さとい
つも知らされていく。そして、壇がねばならない空白の
資料集めも大へんな仕事である。こんな時、先に羽柴先
生が提案した、各年代別や項目別の研究班を思い出す。
これらが相互の資料を持ちより研究すれば、一つづつ新
しい分野が拓けるかもしれない。

郷里の歴史は、学者や研究者の本題に關連した余暇の
仕事ではなく、一つのテーマに純粹にとり組み、「史談」
紙上を賑わすのは、楽しい学習であり、一つの使命でさ
えあると思っている。
(おわり)

叢書

清州佐伯村おぼえ書 (十三)

へ第十次昌國佐伯開拓田小史

會員 矢野 徳 弥

四 自立への準備

「清州のウクライナ」といわれる、遼河中流の穀倉地
帯に位置する、地の利、と、温和と勤勉な同郷人の集団
が生む、人の和に支えられ、順調な歩みを進めてきた佐
伯開拓団は、余すところ後一年で、その建設を終る見通
しとなった。このまま進めば、康徳十三年(昭和二十一
年)の春には、めでたく「清州佐伯村」が誕生するので
ある。十九年に入ると、この日に備えるいくつかの動き
が見られるようになった。

〔部落名の改称〕

本隊が入り、団の北部に二つの部落が設けられたこと
により、当初から構想された地域内の部落配置は、これ
でほぼ終了した。団ではこの機会をとり、かねて団員
達から出されていた要望を入れ、部落の原地名を、日本
式に改称することとし、四月一日から実施した。

○豊栄(とよさか)

弥野の頭文字を変えたと思われる。